
IS インフィニット・ストラトス ~ 黒い千本桜

9

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラトス ～黒い千本桜

【Nコード】

N3522U

【作者名】

gg

【あらすじ】

昔、織斑一夏、千冬、篠ノ之箒、東には大切な友がいた。名前は、朽木黒哉。

剣術が得意であり実力は千冬にも劣らない実力を持っていた。彼は、ある日突然4人の前から姿を消した。

それから、数年がたち彼は再開することになる！そして・・・

オリ主が使うIS？はブリーチ要素が入ってきます。ですがブリーチを知らなくても十分話はわかりますので気軽に暇があれば読んで

くだらぬ。

1話 始まり(前書き)

文の才能がないのでとこころどこころおかしいとおもいますがよろしく
おねがいします!!

では、どうぞ!!

1話 始まり

インフイニット・ストラトス、通称ISと呼ばれるマルチフォー
ムスーツが篠ノ之束の手によって開発された時、世界の情勢は一変
した。ISには通常兵器がまるで役に立たず、IS一機であらゆる
戦況へ対応が可能、陸海空、どの戦力もISには通用しない。その
認識が世界へ広まった時、兵器への転用が危惧されたが、世界の思
惑から外れ、スポーツとしてISを扱う競技などが多くなり、完全
に兵器へ転用されると言う事態は回避された。

このように一見すると完璧な戦闘力を持つように思えるISだが、
一つだけ致命的な欠陥があった。

それは、ISは詳しい原因は不明だが、女性にしか扱えないと言う
事。その事実が浮き彫りになった時から、女性優遇の体制が世界中
に広まり、そして現在は女尊男卑の風潮が広がっていた。

そんな中、世界に一人？男でISを使えるものがいた。名前は織斑
一夏。

そして、それが原因で一夏はIS学園という学校に入ることになる。

「こんにちは皆さんこの度は、IS学園へのご入学おめでとござい
ます。」と山田麻耶という先生による
HRが始まった。

「織斑君、織斑君・・・織斑君（涙）」

名前呼ばれること数回、やっと気づいたときには山田先生はもう涙
目であった。

一夏は慌てて立ち上がった。

「織斑 一夏です。よろしく願いします。」
と、

しかしそれだけでは周りの生徒（女子だけだが）がよしとする訳が無かった。

皆無言でこう言っている。「他には？」
意を決したのか一夏がまた口を開く。

「以上です。」

すると、たくさの女子から「もつとないの〜!?!」などと声がとんできた!

なんとか、助けを求めようとこのIS学園にいる幼馴染の篠ノ之箒に目で合図されるが軽く受け流された。

そんな時

「挨拶もろくにできんのか、お前は」

「げ!!! 千冬n.n..」

バーン! 出席簿で殴られた。

「織斑先生と呼べ」

「……はい、織斑先生」

「織斑先生、会議の方は終わってたんですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押し付けてすまなかったね」

「い、いえ。副担任ですしこれくらいのは……」

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

ワーオさすがちー姉、いつものようにキツイ発げん「キヤー！本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に憧れてこの学園にきたんです！北九州から！」

「あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです！」

「私、お姉様のためなら死ねます！」

「：毎年、よくこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」
千冬は本気であきれてた。何か思い出したかのように口を開いた

「そうだ、山田君」

「なんででしょうか？」

「どうやらもう一人ここに入ってくる生徒がいるらしい」

「そうなんですか！？全く知りませんでした！」

「実は、私もさっき聞いたばかりなのだ。どんなやつかもわからん」

一夏はどうせ女子生徒だろうとため息をついていた。

そんな時、教室の扉が開かれた！！

「すみません。おくれてしまいました！」

その声の方を見ると一夏は目を見開いた！一夏だけではなく千冬、
篝も同じく驚いた！

そこに、立っていたのはもっとも以外で、でも、いつか会う時が来るのではないかと思っていた人物だった。

「……………黒哉！」

1話 始まり（後書き）

オリ主の出番が……

次は、いっぱいであますので

オリ主の容姿ですが、ブリーチの朽木白哉です！

わからない人は検索してもらえばわかりますので！！

ヒロインなんですが、だれがいいですかね？

迷い中なので

アンケートをとりたいと思います！

感想に、名前を書いてください。

人気があつた3人をヒロインにしたいとおもいます。

ちなみに、千冬にはもうフラグは立っていますので

次の更新は明日できればしたいと思います。

2話 再開（前書き）

文才がほしい・・・..
やっぱりシャルは人気だな

2話 再開

クラスは、今起きてる状況に反応することが出来ず静まり返っていた。

その中でも、一夏、箒、千冬は誰よりも混乱しているだろう。

そして、黒哉は状況を察したのか生徒の前に歩いて行き

「少しトラブルあり遅れてしまった、すまない。名は朽木黒哉だ見ての通り男だが

よろしく頼む。」

と一礼した。そして、ス数秒の沈黙の後生徒のだけれが「・・・男」とつぶやいた瞬間

「「「「「キャーーーーー」」」」」

とてつもない歓声が帰ってきた。

「やばくない、めちゃくちゃかつこいい！！！」

「クールな感じだ！ 守ってもらいたくなるような！」

「この世にあんな人がいるなんて地球もすてたもんじゃないわ！」などと声がしている。

そんな中山田先生が口をひらいた。

「で、では黒哉くんは真中の一番左の席についてください」

「はい」

そして、黒哉で席につこうとした瞬間チャイムがなった。

その、チャイムで千冬は我に帰った。

「SHRショートホームルームは終わりだ。諸君らにはこれからISの基礎知識を半月で覚えてもらう。」

その後実習だが、基本動作は半月で体に染み込ませる。いいか、いいなら返事をしろよ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

そして、HRはおわった。

「それから、織斑、朽木、篠ノ之は私についてこい」といって廊下の方に歩いていった

そして、3人は呼ばれた方へと向かっていった。それぞれの気持ちをむねにしたまま

4人は、廊下に集まった。

そして、最初に口をひらいたのは一夏だった。

「黒哉、お前今までどこに行ってたんだよ！急に姿消して俺や、千冬姉、箒、束さんがただ心配したと思ってるんだ！」

一夏は、完全に怒っていた。そして、千冬、箒はその答えを待つように黒哉の顔を見る

数秒たってから、黒哉は口を開いた

「……すまん。だまって姿を消した理由はあれ以上一夏、千冬さん、箒、束さんに迷惑がかかると思ったからだ」

「それって……」

〈回想〉

黒哉は、昔捨て子だった。おなががすいて倒れそうな所を織斑家にお拾われたたのだ

それから、黒哉は居候としてすむことになるのだが
それから、千冬に剣をきたえられたり、一夏とも中よくなったりその友達の篠ノ之家とも交流をふかめたのだが
ささいな事がきっかけで事件が起こった

ある日、一夏と篤が不良にからまれていたのだ。理由はただぶつかったそれだけ

それだけ、不良は二人に暴力を加えようとしてきたのだ。それを見ていた黒哉は助けには入りその不良を追い払った

かなりの体格差だったのだが圧勝だった。ちなみに黒哉はケンカがめちやくちゃ強い。ここ重要

一見落着と思われたのだが。どうやら、その不良はよっぽど悔しかったらしく仲間を引きつれて黒哉を見つけるたびに襲うようになった。それだけならよかったのだが

ある日、その不良達は一夏と篤を人質にとってきたのだ。黒哉は手をだす事ができずにいた

しかし、千冬の来たことによりなんとか解決できた。

〈回想終了〉 わかりにくかったかも！ 作者の文才を許してください。

千冬が口を開いた。

「つまり、お前はまた私達に迷惑をかけないために姿を消したと？」
黒哉はうなずいた。

「あの、事件にせいでみんなにはとんでもない想いをさせてしまった。あれ以上は俺があそこにいれば確実に迷惑がかかると思った。だから」

話している途中、出席簿が黒哉の頭を襲った。

黒哉はあまりの威力に顔に似合わない顔をしている

「バカ者が！ ここにいる3人、そして東はだれもお前のせいなど
思っていないかった」

と千冬

「その言葉に一夏がうなずく、そして

「そつだ、私もあの人もお前を全くせめてなどいなかった」
と箒

そして、黒哉はいつもクールな表情は違い少し笑って

「東さんにも同じようなことを言われたな。」

そして

「何も言わず去ってしまったことを許してもらいたい。そしてでき
ることならばこれからよろしく頼みたい」
頭を下げた

そして、3人は笑い

「「「当たり前だ」」」

と声をあげた。

しかし、箒が口を開いた。

「ところで、さっきあの人に同じような事を言われた言っていたが
どかで会ったのか？」

黒哉はうなずき

「旅をしている途中に会ってな、俺はすぐに立ち去ろうとしたのだ
がどうしてもというので住まさせてもらった。」

そつ、今東は絶賛逃亡中であるためたまたま会ったのだろう。

その言葉に、箒はなんともいえない表情を千冬は青筋を浮かべ黒い
オーラを放っていた。一夏はやばいと悟った。理由は簡単に姉が黒
哉に惚れていると知っているからだ。

「ほぅ、二人で仲良く暮らしていたというのに私にはなんの連絡もよこさんとはな。」

やけに二人でという言葉を強調していたのは気のせいだろうか

「千冬さん？どうしたんですか？」とクールな表情で聞く黒哉

だが、ここでチャイムが鳴ったのだった。千冬はそこで我に返り

「バカどもさつさと教室のもどれ！！ それから朽木ここでは織斑

先生だ！わかったか？」

「・・・はい」

となんとも言えない再開を果たしたのであった。

2話 再開（後書き）

どうでしたか？

箒には、フラグをたたせるべきなのか？

やっぱり、一夏にくつつけるべきかホント悩みます。

それから、主人公紹介は書くべきでしょうか？

次回は、ようやくヒロインズの一人がでますので感想まっています。

3話 金髪ロール(前書き)

話しがあまり進まないww

3話 金髪ロール

なんとも言えない再開をはたしてから授業が始まった！

「であるかして、ISは」

山田先生がすらすらと教科書を読んでいくが正直ギリギリでわかるくらいだ

やばい！どうしよう全くわからん！とキョロキョロしている一夏それに気づいた山田先生が一夏に話しかけた

「織斑君何かわからない所がありますか？」

一夏は何かを決めたように手を挙げて

「全くわかりません！」

「ぜ、全部ですか？えっと今の段階でわからないと言う人はいますか？」

「……」

当然、誰一人として手を挙げていない

それを見て頭を抱えながら千冬は一夏に訪ねた

「……織斑、入学前に配られた参考書は読んだか？」

「古い電話帳と間違えて捨てました」

パン！！と再び一夏の頭から良い音が響く

「必読と書いてあったたろうが馬鹿者。後で再発行してやるから」

週間以内に覚える」

「い、いや、一週間であの分厚さはちょっと」

「やれと言っている」

「……はい。やります」

相変わらず、一夏は千冬さんに頭が上がらないようだ

「……貴様、『自分は望んでここにいるわけではない』と思っているな？」

千冬さんのその一言にビクッと動揺する
顔が引きつっているのが見なくてもわかる

「望む望まざるにかかわらず、人は集団の中で生きなくてはならない。それすら放棄するなら、まず人であることを辞めることだな」

こっちも相変わらず、厳しいな
でも、その言葉には深い意味が込められているのがわかる

「相変わらずだな」とその光景を見て黒哉は苦笑する。その苦笑している黒哉を見ていた隣の女子生徒が鼻血をだし倒れそうになっていたのは置いておこう。

「先生、一夏には俺が後で教えておきますから、授業を進めましょう。」

と提案して千冬は「仕方がない」といって承諾し授業進みなんとか終わった。

放課後

「助かったよ！！黒哉、止めに入ってくれなかったら俺はどうなっていたことか」

「気にするな。久しぶりに面白いものもみれたからな」と話しをしていると

「ちょっと、よろしくて？」

突然声を掛けられた。

「お返事がなにのですが聞いていますの？」

「あ、ああ、何か？」と一夏

「……………」無言の黒哉

「まあ！なんですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なので、それ相応の態度というものがあるんじゃないかしら？」

「……………」二人とも無言になる

かなり から目線で話しかけられてどうしようか迷っている一夏。黒哉は目をつぶりひたすら無言
そして一夏が口を開いた

「悪いな。俺、君が誰か知らないし」

「わたくしを知らない？このセシリア・オルコットを？イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを！？」
と言ってくる。

そして、一夏は首をかしげ

「代表候補生ってなんだ？」

この一夏の一言で聞き耳を立てていたクラスの女子がずっとこける
セシリア・オルコットは、悲惨な顔をしている。
そして黒哉が口を開いた。

「代表候補と言うのは国家代表IS操縦者の事だ、言うなればエリートのことだ。それくらい言葉の意味からわからないのか？」と呆れている

「なるほど。確かにそういわれれば単語から想像出来るな」

「そう！エリートなのですわ！どうやら、そちらの方が理解が良いみたいですよ！」

といい黒哉を指差すセシリア。その行動に黒哉の頬が一瞬引きつった。

「本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡なのよ。その現実をもう少し理解していただけるかしら？」

「そうか。それはラッキーだな」と一夏

「……」また無言の黒哉

「馬鹿にしていますの？」

ギロツと睨みつけてくるセシリア・オルコツト

「大体、そちらの方はある程度理解しているようですが、あなたはISについて何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。男でISを操縦できると聞いていましたから、少しくらい知的さを感じさせるかと思っていましたけど、期待外れですわね」

「ですから、ISのことでわからないことがあれば、まあ、教えてもよくなってよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

「黒哉、入試ってISを動かして戦うってやつか？」

「ああ」

「それ以外に入試などありませんわ」

「あれ？俺も倒したぞ」

「は？」

「夏の言葉に、目を見開いて驚いている

「わ、わたくしだけと聞きましたが？」

「女と言う枠組みの中だけということなのだろう。」

「つ、つまり、わたくしだけではないと？」

「そういうことだ」

「あなた！あなたも教官を倒したって言うの!？」

「俺は、試験自体を受けていない。少々特別な理由があるからな」

「特別な事々」話す気はない」「」

「一夏は思った。あゝあ。黒哉怒ってるな絶対

「っっ!」

話しを遮られ怒りをあらわにしているセシリア

そんな時チャイムが鳴った。

「！またあとで来ますわ！逃げないことですよ！よろしくて!？」
と帰ろうとした。セシリアしかし黒哉が口を開いた。

「待て、貴様に1つ警告しておこう。よほど自信があるようだが
あまり、自分に自惚れるなよ、何時か足元をすくわれるぞ」と言い
自分の席に戻って行った。

セシリアはむっととした表情で帰っていた。

そんな、光景を見て一夏は黒哉こえゝと思ったのだった、

3話 金髪ロール（後書き）

早く、黒哉の戦闘シーンが書きたいところです。
フラグについてですが。

一夏2で黒哉3の割合でフラグを建てようと思っているのですがどうでしょう？

アドバイスや感想それにアンケートの方もお待ちしております。

アンケートは、そろそろですね。

次回もよければ読んでください

主人公設定（前書き）

今頃ですが・・・

主人公設定

名前 朽木黒哉 ちなみに読みはくちきこくやです。

身長 180cm

体重 64kg

容姿 黒髪で長め、髪止めなどは使っていない

性格 普段は、クールな顔立ちをしているが、ときどき苦笑したりする。完全にバカ笑いすることはない

礼儀などもしっかりしており、年上の人にはしっかり敬語を使う。

あまり感情を表に出さない。

怒る時は本人も知らず殺気出ている。

仲間の事を自分の誇りだと思っていおり仲間には何かあれば、助けに動くがその時もすっかり冷静さを 保っており確な判断ができる。昔から一夏異常にモテルのだが一夏異常に鈍感で恋愛というもの自 体にもあまり興味がない

首には、黒い桜の様なアクセサリをしている。

特技 スポーツ全般、剣術

好きな事 散歩、辛い物、お茶を飲む、作る

嫌いな事 人を見下す者、仲間を傷つける者、甘いもの

黒哉のIS ???? わかる人はどんなISを使うのかわかっていると思いますがいちよう?にしときます。

でも、次の話が、その次の話しで確実に出るので楽しみにしててください。

主人公設定（後書き）

こんな感じですかね

わからない事があつたら質問してください。

容姿がイメージできない人は朽木白哉で検索してみてください。

4話 代表決め(前書き)

今回はながいです。

4話 代表決め

あれから授業が始まった・

「授業を始めると言いたい所なのだが、クラス対抗戦に出場する代表者を決めなければならん。自薦他薦いづれも構わん

誰かいないか？」

と生徒に問い掛ける千冬

そして、いつきに女子生徒の手が上がる

「はい！、私は朽木君を推薦します！！」

「私も！！」次々声がはもっていく。

そして

「私は織斑くんがいいと思います！！。」

「賛成」とこれもまた次々に声がはもっていく

この事に、黒哉は目をつむっているだけで特に反応はなし、一夏は

「お、俺！？」などと慌てている。

「他に候補者がいなければこの二人に勝負してもらい買った方にやってもらおう事になる。ちなみに他薦されたものに拒否権はない。わかったか？」

「そ、そんな俺は「わかったか？」・・・はい」と一夏の意見は消されたのであった・

そんな中、女子生徒からの声が聞こえた。

「納得できませんわ！」

そう、セシリアだ。セシリアは興奮したのか、椅子を鳴らして勢い良く立ち上がる

「そのような選出は認められませんわ！ 大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！ わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

と言い反対すると同時に優希達二人を侮辱し始める

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！ わたくしはこのような島国までIS技術を修練しに来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

侮辱もエスカレートしていき

「いいですか！？ クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては」

最初、一夏はこれで俺がやるよりやる気のあるやつがやるべきだな・うんなどと逃げの口実を自分の脳内で考えていたのだが我慢の限界を迎えたようだ。

「イギリスだって大してお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

「あ、貴方、わたくしの祖国を侮辱するのですか！！」
とうとう黒哉も口を開いた。

「一夏、オルコット、貴様らのくだらないケンカで互いの国を侮辱しあうな。貴様ら以外にその国に住む人達の事を考える。」いつもより声のトーンが低い。

その言葉を聞きお互いに黙る。一夏とオルコット。

千冬が口を開いた。

「では、その3人以外にはもういないな？」と生徒を見る。

「では、3人には戦ってもらい勝ったものに代表になってもらう。

最初にオルコットと織斑が戦ってもらい勝った方が

朽木と戦う。これでいいだろう。異論はないな？」

「はい」

「了解した」

千冬が黒哉をシード権にした理由は簡単。一夏とセシリアは決着をつけたいだろうと思ったからだ。

「後で泣いても知らなくてよ？」

「絶対に勝つ」と睨みあう二人

二人に出席簿という名のもはや出席簿で出せる威力を超えた攻撃が繰り返される。

「いい加減にしろ！、そういう事だ戦いまでにそれぞれ準備をしておくように。では、授業を始める」

こうして、授業は進んで行った。

セシリアとの決闘宣言から、放課後になった。一夏と黒哉は一夏が黒哉のISの事を教えてくれと言って来たので教えている所で

ある。

「ああ、織斑君に朽木君。まだ教室にいたんですね。よかったです。」

「「？」」

二人は呼ばれた方を振り向くと、麻耶が書類を片手に立っていた。

「えつとですね、二人の寮の部屋の事なんですけど。一人部屋と相部屋がありましてどちらがいいですか？」

麻耶の手には、部屋番号の書かれた紙とキーが握られていた。

IS学園は全寮制であり、生徒は全員寮で生活することが義務づけられている。これは将来有望な生徒達を勧誘する様々な国から守る為の措置である。

「え？、俺は一週間は自宅から通学してもらって話でしたけど」

「俺もホテルから通うつもりだったのだが」

「それなんですけど、事情が事情なので一時的な措置として部屋割りを無理やり変更したそうなんです。」

「とにかく寮に入れるのを最優先したみたいです。一ヶ月もすれば二人の方も用意できますから、しばらくは我慢してくださいね」

「部屋の件はわかりましたけど、荷物は一回家に帰らないと準備できないですし、今日はもう帰っていいですか？」

「俺もホテルに一度もどらなければ」

「あ、その事なんですけど、二人の荷物なら……」

「この私を手配しておいたやった。ありがたく思え」と千冬が話しに入ってきた。

「……」「二人とも無言である。心の中では「俺達にプライベートは存在しないのか」と思っていた。

「まあ、生活必需品だけだがな、黒哉の方はホテルにあった物をキヤリーバックに纏めていれておいたぞ」

「で、部屋はどちらがいいですか？」

二人とも無論一人部屋がいいのだが、

「俺は相部屋でいいです。」と黒哉は口を開いた。「ほ、本当かありがとう黒哉！！」

「気にするな」と告げる

が、一夏の頭に衝撃が走った。

「全く、お前も少しは黒哉をみらなわんか」

「す、すみません」

「すまん、黒哉」

「いえ、気にしないでください織斑先生」

「そ、それからだな。その生徒がない時などはいつもの呼び方でかまわん。」と少し頬を染めて言う千冬

「わかりました。千冬さん」

「う、うむ」とこんなやりとりをしているのだが一夏、山田先生が空気と化していた事はまちがいないだろう。

そして空・山田先生が口を開いた。

「じゃあ、時間を見て部屋に行ってくださいね。各部屋にはシャワーがありますけど、大浴場もあります。学年ごとに使える時間が違いますけど……えっと、その、織斑君と朽木君は今のところ使えません」

「え、なんでですか？」

意味がわかってないらしく一夏は、山田先生に聞いた

「アホかお前は。まさか同年代の女子と一緒に風呂に入りたいのか？」

と千冬に言われ変な目で見られるのだった。

「おつ、織斑君っ、女子とお風呂に入りたいんですか！？ダ、ダメですよ！」

「い、いや、入りたくないです」

一夏は慌てて否定したが

「ええっ？女の子に興味がないんですか！？そ、それはそれで問題のような………」
と勝手に暴走していたのは置いておこう。

そして、二人はかぎをもらい部屋に行くのだった。

「俺の部屋はここか」と黒哉は自分の鍵の番号と合っている部屋に入った。

そして、声がした。

「あ、君が私と相部屋になったものかこんな恰好ですまない。私の名前は篠ノ之………」と箒がバスタオル一枚で出てきた。ドアの音

がしたのでシャワーからでてきたのだろう。入ってきたのが女子ならば今状態はこれと言って問題はない。

だが、入ってきたのは黒哉だ。男だ。

「……………」一気に顔赤く染める篤。

「す、すまない。い、今すぐに着替えてくる。」と言ってとんでもない早さでシャワールームに帰って行った。

もし、これが一夏ならボコボコにされていただろう。篤は昔から黒哉に強くでれないのであった。

それから数分がたち。篤が出てきた。そして黒哉は頭を下げた。

「すまない。偶然とはいえ見てしまったのは事実だ。許してもらえないなどは「い、いいんだ私の方もあんな恰好ですまない」……………うか」

「で、何故黒哉がここにいるのだ？」

「ああ、今日から俺の部屋準備されるまで相部屋だ。よろしく頼む。」

「そ、そうなのか。よろしく頼む。」少し頬を赤くする篤

「そういえば。剣道の大会で優勝したらしいな。おめでとう！」

「な、なぜ知っているんだ」

「新聞で見たのだ。」

「そ、そうなのか。あ、ありがとう」と一気に顔赤くなる。黒哉に

褒められた事がよほどうれしかったのだろう。

「それから、明日から一夏にESやの剣の事を教えてやってくれな
いか？」

「あ、ああ構わない」

「そうか、筈ならば頼りになる」

「じゃ、じゃあ私はもう寝りゆ。お。おおやしゆみ。」とかみま
く
り
で
布
団
に
入
っ
て
い
っ
た
。
ど
う
や
ら
、
一
気
に
褒
め
ら
れ
過
ぎ
て
ど
う
し
よ
う
も
い
ら
れ
な
く
な
っ
た
ら
し
い
。

「おやすみ。」何故あんなに顔を赤くしたのだろうと疑問に思いつつ

それから、黒哉はシャワーを浴び浴衣に着替え寝たのであった。

4話 代表決め（後書き）

筭が、おかしいなWWW

どうか、ゆるしてください。

次回は、とうとう黒哉のISがでるかな？
楽しみにしていてください。

ヒロインアンケート(前書き)

自分では、どうしても決めかねまして・・・

ヒロインアンケート

タイトル通りなんですが

前にも、アンケートを取ってコメントして頂いた結果

シャルロット、篝、楯無は決まったのですが

これで、終了でいいですかね？ このアンケートで完全決定したい
と思います。

もう、ちよつと増やしたい気もしますがそうすると一夏が空気が
がとずつと迷っています。

? まだ、増やす

? これで終了

? ハーレム

? は選んで頂いた方は名前も書いていただけるとありがたいです。

できれば、アンケートに協力おねがいします。

書き忘れてました。千冬さんも決定してます。
すみません。

ヒロインアンケート（後書き）

期限今週土曜日まででおねがいします。
短い期間ですが協力おねがいします。

5話 圧倒！？ 黒哉のIS（前書き）

とうとう黒哉のISがです。

ですが、あまり説明がうまくないのでブリーチを知らない人は朽木白哉画像で検索して頂ければわかりますので最初に見ておくことをお勧めします。

5話 圧倒!? 黒哉のIS

二人の部屋が仮に決まってから次の日

「というわけで、ISは宇宙での作業を想定して作られているので、操縦者の全身を特殊なエネルギーバリアーで包んでいます。また生体機能も補助する役割があり、ISは常に操縦者の肉体を安定した状態へと保ちます。これには心拍数、脈拍、呼吸数、発汗量、脳内エンドルフィンなどがあげられ」

「先生、それって大丈夫なんですか？　なんか、体の中がいじられているみたいでちょっと怖いんですけど……」

「そんなに難しく感じることはありませんよ。……人体に悪影響が出るわけではないので」

山田先生の言葉がちよつと詰まった。何か例えを上げようとしたけど、俺や一夏を見てやめたみたいだ。何を言おうとしたんだろう。「そ、それともう一つ大事なことは、ISにも意識に似たようなものがあり、お互いの対話　つ、つまり一緒に過ごした時間で分かり合つというか、ええと、操縦時間に比例して、IS側も操縦者の特性を理解しようします」

要は、一緒に練習すればするほど仲がよくなるようなもんだな。より長い時間一緒にいればそれだけISの方も操縦者に応えてくれる。

「それによつて相互的に理解し、より性能を引き出せることになるわけです。ISは道具ではなく、あくまでパートナーとして認識してください」

すかさず、女子が拳手する。

「先生、それって彼氏彼女のような感じですかー？」

「そつ、それは、その……どうでしょう。私には経験がないのでわかりませんが……」

経験というのは男女交際のことだろう。赤面してうつむく山田先

生を尻目に、クラスの子はきやいきやいと男女についての雑談をはじめている。

しかし、チャイムが鳴り、そんな男を置いてけぼりにした授業も終わりとなる。

「あつ。えつと、次の時間では空中におけるIS基本制動をやりますからね」

ここIS学園では実技と特別科目以外は基本担任が持つらしい。たった十五分の休み時間のためにいちいち職員室まで戻らないといけない先生たちは、お気の毒としか思えなかった。

一夏が黒哉の所に向かってから即効で女子に囲まれた。

「ねえねえ、朽木くんと織斑くんってさあ！」

「はいはい、質問しつもん！」

「今日のお昼ヒマ？ 放課後ヒマ？ 夜ヒマ？」

「いや、一度に聞かれても」

一夏は一気に質問されて慌てているが、黒哉は全く動じていない。

「質問するのは構わないが、するなら一人一人言ってほしのだが。こいつホントに高校生かよと思う一夏であった。」

黒哉の言うことを聞き、一人一人が順番に改めて質問することにしたらしい。

そこから、いろいろ質問された二人であった。そして

「千冬お姉様って自宅ではどんな感じなの！？」

「え。案外だらしな」

「休み時間は終わりだ。散れ」

一夏が質問に答えようとしたら、いつの間に背後にいた織斑先生に叩かれた。しかもこのタイミングでの叩きということは、個人情報をばらされたくないからだろうか。このままだと叩きキャラとして決まってしまうぞ、千冬姉いいのかそれでいいのか？と思う一夏であった。

「ところで織斑、お前のISだが準備まで時間がかかる」

「へ？」

「予備機がない。だから、少し待て。学園で専用機を用意するそう
だ。それから朽木には何故か用意がされていないのだが・・・」

「????？」

「せ、専用機！？一年の、しかもこの時期に!？」

「つまりそれって政府からの支援が出るってことで・・・」

「ああ。いいなあ。私も早く専用機欲しいなあ」

女子はかなり驚いているみたいだが、一夏はまったく意味がわか
らないように首をかしげている。

「本来なら、IS専用機は国家あるいは企業に所属する人間しか与
えられない。が、お前の場合は状況が状況なので、データ収集を目
的として専用機が用意されることになった。理解できたか？」

「な、なんとなく・・・」

「え、でも俺には用意されて黒哉にはないって・・・ ISはどう
するんですか？」

「心配いらん。俺はもう専用機を持っている。」

「そこにいる全員が驚いている。」

「え!?! も専用機を持つてるの!?!」

「はじめて聞いたよ、そんなこと!」とおどっているが千冬はなる
ほどなというような顔をしている。

「静まれ。授業を始めるぞ」

そして、授業が始まった。

黒哉、一夏、箒は今食堂でご飯を食べている最中。

「一夏、今日から私がお前を鍛える!!」突然宣言された。

「え? 鍛えるってことはISの事教えてくれるのか?」

「黒哉の頼みでもあるからな。」

「そついうことだ一夏。」

「じゃあ、お言葉に甘えさせてもらっか」

「今日の放課後」

「ん？」

「剣道場に来い。一度、腕がなまってないか見てやる」

「・・・わかったよ」

腕がなまってないか、って、ISの特訓じゃないの？

「どういうことだ」

「いや、どういうことって言われても・・・」

「どうしてここまで弱くなっている!？」

「受験勉強をしたから、かな？」

「・・・中学では何部に所属していた」

「帰宅部。三年連続皆勤賞だ」

なんの自慢にもならないな、それ。まず帰宅部って皆勤賞なんて

あるのか？

「・・・なおす」

「はい？」

「鍛えなおす！ IS以前の問題だ！ これから毎日、放課後三時

間、私が稽古をつけてやる！」

それから、地獄のようなトレーニングを一週間受けたのだった。

とうとうセシリアとの対決の日が来たのだが・・・

「なあ、箒」

「なんだ、一夏」

「気のせいかもしれないんだが」

「そうか。気のせいだろう」

何か問題でも解決しなかったのだろうか？

「ISのことを教えてくれる話はどうなったんだ？」

「・・・」

「目をそらすな」

「まさか、剣道ばかりやって、肝心のISの特訓をしていないとか

「言わないよな？」

「そのまさかだ」

馬鹿か、お前たちは！

「し、仕方がないだろう。お前のISもなかったのだから」

「まあ、そうだけど・・・じゃない！ 知識とか基本的なこととか、あつただろ！」

「・・・」

「目をそらすなっ」

「まさか、基本的な知識とかも、何一つやっていないとか・・・言わないよな？」

「そのまさかだ」

簡単に言つと、一夏の剣の腕があまりにもおちていたので剣の修行ばかりやってしまった筈である。

なにより一夏の専用ISは何かごたついていたらしく、来ていない。そう、今もまだ来ていない

そんな時

「織斑くん織斑くん織斑くん！！」

「来ました！ 織斑君の専用IS！」

いつも通りめちゃくちゃあわてている。

「落ち着いてください山田先生。はい深呼吸」

「は、はい。す〜は〜す〜は〜」

「はい、そこで止めて」そうすると一気に顔を赤くする山田先生。

「ぶっは〜ま、まだですか？」止めるタイミング失った一夏であった。

「一夏、目上の人をからかうものではない。」と黒哉

「その通りだ。バカ者」といつもの必殺出席簿アツクがさく裂した。

「千冬姉・・・」パン！！またさく裂した。

「織斑先生とよべ学習しろ。さもなくば死ぬ。」

「死ぬって・・・そんなんだから彼氏ができないんだよ」

「一夏、織斑先生はお前の事や仕事で忙しいのだろう。それがなければ彼氏などすぐにできると思うがな」と意外にも黒哉がその言葉を口にした。確かに黒哉は自分の恋愛には興味はないが千冬が世間でいう美人だということはわかるのである。

「そ、その通りだ。／＼／＼」と顔を赤くする千冬。黒哉からそんな言葉でるとは本人もおもっていないかつたらしい。

「う、うんでは、織斑、すぐに準備をしる。アリーナを使用できる時間は限られているからな。ぶつつけ本番でものにしる。」

「はい？」

「この程度の障害、男なら乗り越えてみせろ。一夏」と黒哉

「え？ え？ なん……」

「早く！」

山田先生、織斑先生、篠ノ之の声が重なった。

鈍い音がして、ピット搬入口が開く。

そこに、『白』が、いた。

白。真っ白。飾り気のない、無の色。眩しいほどの純白を纏ったISが、その装甲を開放して操縦者を待っていた。

「これが……」

「はい！ 織斑君の専用IS『白式』です！」

「体を動かせ。すぐに装着しる。時間がないからフォーマットとフイッティングは実践でやれ。できなければ負けるだけだ。わかったな」

せかされて、一夏は純白のISに触れる。

「背中を預けるように、ああそうだ。座る感じがいい。後はシステムが最適化をする」

「ISのハイパーセンサーは問題なく動いているな。一夏、気分は悪くないか？」

「大丈夫、千冬姉。いける」

「そうか」

「黒哉、箒」

「なんだ？」

「？」

「行ってくる」

「勝つてこい」

「逃げずによく来ましたわね。褒めて差し上げますわ」

こうして、セシリアと一夏の激しい戦いは……終わった（笑）
がつくほどの負け方だった。

「あれだけ有利な状況であのさまか、大馬鹿者」

白式の単一仕様能力

ワソオフ・アビリティー

『零落白夜』が持つ特性（自分のシールドエネルギーを攻撃に換え
て相手のシールドバリアーを引き裂き、絶対防御を発動させること
で一気に相手のシールドエネルギーを消費させる能力つまり、バリ
ア無効化能力この能力をうまく使えず敗北した。

「武器の特性を考えずに使うからあなるのだ。身をもって分かっ
ただろう。明日からは訓練に励め。暇があればISを起動しろ。い
いな」

「……はい」

途中でめちゃくちやかっこいい事を言っていた一夏だが負けた。う
ん負けた。

そして、

「俺の番だな。」と黒哉が言った瞬間。首にかけていた黒い桜の
ようなアクセサリが光った。

そして、そこにいたのは。

確かに、見た目は変わった、だがそれだけだった。装甲と呼ばれる
ものが何一つないの黒哉の身についていない。

黒い浴衣にも見えるような服の上に、白い羽織を着て、髪留めで髪が止められていた。さらに、マフラーのようなものを首に巻いている。そして、腰には刀が一本。たったそれだけだ。

「・・朽木まさかそれがお前のISか？」と千冬が口を開いた。

「はい。では、行ってくる」と言った瞬間そこに黒哉の姿はなかった。

「い、いない!?」と驚く一夏と山田先生。そして、その他の二人はというと

か、かつこいい と心の中で思うのであった。

そして、セシリアの前に黒哉はあらわれた。ちなみにセシリアはもうダメージは回復してある。

「あ、あなたISはどうしたのですか!？」と聞くセシリア

「これが、俺のISだが」

「お、おちよくつていますの!？」

「戯言はいらん。始めるぞ」

「どうなってもしりませんわよ!!」とお得意のレーザーを撃つただけだ。

「どこを見ている？」とセシリアの裏から声が聞こえた。

「な!?!この!?!」とレーザーを飛ばすがまた黒哉の姿は消え。セシリアの前方に現れた。

「六杖光牢」と言った瞬間。六本の黄色い長い四角がセシリアを囲んだ。

「う、うごきませわ」

「言ったはずだ。あまり自惚れるなど。世界は広い。決して貴様が最強なのではないということを教えてやる。」

そして、腰にある刀を抜いた。その刀は普通の刀と少し違った。刀身が黒い。そうその刀はひたすら黒いのだ。そして、その刀を胸の前に掲げ。

「散れ、千本桜」と言った瞬間刀身が消え。回りをピンクのでふち

どられている黒い桜の花びらが舞った。
そしてわけもわからず、セシリアの意識はシャットダウンした。おちてくるセシリアをキャッチして黒哉は地面に降りた。
その、試合で言えることはただ一つ

圧倒的

この試合を見ている、すべての人が思った事だった。そして
か、かっこいい とほとんどの女子は黒哉のISS姿を見て思った
のだった。

5話 圧倒!? 黒哉のIS(後書き)

ながい(笑)

黒哉のISの説明があまりうまくできなくてすみません。
強すぎたかな(笑) 黒哉……

アンケートの方もよろしくお願いします。

6話 正体不明のIS（前書き）

今回は、短めです。

6話 正体不明のIS

黒哉とセシリアの戦いが終結してたころ、みなが驚愕している中、冬ただ一人は違った。

（確かに、すごい。だが、あれが本当にISなのか？ 確かめる必要があるそうだな）そして観戦した所から離れた・

そして、ある人物に連絡を取った。

「束か？」

「やつほ〜 ひさぶりでねだちーちゃん！。いきなりだから驚いちゃった」

「少し聞きたいことがあつてな」

「こー君のISの事でしょ？」ちなみにこー君とは黒哉の事である。

「ああ。見た目からしてもそうだが、戦闘スタイルどれもISとは全く違う。あれは、本当にISなのか？」

「う〜ん。あれはね。実は私が作った物じゃない〜んだ〜」

「な!？」

「あれは、こー君が元々持ってたものなんだよ。私も最初は驚いちゃったよ〜。でも、確かにシールドエネルギーは存在してるんだよ。本当によく分からないものなんだ〜」

「じゃあ、一体だれが？」

「それもわからないよ〜、でも、調べてて分かった事があるの。」

こー君のISと同じ系統のISをもう一体確認することができたの。」

「本当か!？」

「うん、でも詳しい事は何一つわからないの。力になれなくてごめんね〜」

「いや、私も少し自分から調べて見るとしよう。」

「みんなによるしく言っておいてね〜じゃあね〜」

「ああ」

通信が切れた後、千冬は何か考えるようにしばらくそこに立っていた。

その頃黒哉は、セシリアを抱っこして保健室に連れて行っていた。

「・・・ここは？」セシリアは目を覚ました。

「保健室だ」

「わたくしは、負けましたのね・・・」

「ああ」

「笑い物ですわね、あれだけの事を言っておいて結局はこれですものね。笑いたければ笑えばいいですわ」

「笑いなどしない。」

「え？」

「確かに、あの態度は俺も頭にきていたがな。お前と戦ってわかったお前が努力をしている事がわかった。努力もせずあの様な態度を取っていたのなら救いようがなかったがな。だが、少し態度がでかすぎるのも事実だ。これからは控えることだな。」

「わかりましたわ」

「よし、俺はそろそろ帰らせてもらうぞオルコット」

「セシリア！ セシリアでいいですわ」

「そうか、じゃあなセシリア。しっかり休んでから来ことだな」そう言っただけで黒哉は保健室を後にした。

「・・・朽木黒哉」

（なんでしよう。この気持ち。もっと彼の事が知りたい）セシリアはかなりの時間同じような事を考えていたらしい。

「クラス代表は、織斑一夏君に決定しました！！ 一つながりでい

い感じですね！」

「なるほどな、クラス代表は俺か……ってなんでだ！！！！黒哉じゃないのかよ！！！」

「俺は、辞退させてもらった。」

「なら、俺に勝ったセシリアがやればいいじゃないか！！！」

「わたくしも、辞退させてもらいましたわ。今回黒哉さんに負けて自分の未熟さを知りましたので」

（あれ今、黒哉の事名前と呼んだ？）とひそかに思った一夏であった。

「そ、そんな」

「織斑、お前は二人に負けているだろ。敗者は勝者にさからえないものだ」

「そ、そんな。だったら黒哉稽古に付き合ってくれよ。」

「無理だな。」

「なんで!？」

「中学3年間なにも鍛えずに来たものがいきなり俺の稽古について来れると思っているのか？」

「そ、それは」

「お前の事は、箒に頼んである。」

「ああ、黒哉に頼まれているからな。私がしっかり稽古をつけてやろう。」ととてもうれしそうにする箒

黒哉に頼まれてという所が強調されていたのは気のせいだろうか。

「そうか、じゃあよろしく頼むよ」少し残念そうにする一夏であった。

「はい、では改めてクラス代表は織斑君に決定しました。」

「その、つまりは黒哉さんは授業後時間があるという事ですわよね？」とセシリアが急に黒哉に聞いてきた。

「ああ、それがどうかしたか？」

「で、でしたら私にISの事を……」

パン！！と手をたたく音によってセシリアの声は止まった。

「では。改めてクラス代表は織斑に決定だ！！これからよりISの事について学ぶように。わかったな？」

「・・・はい」

この時、千冬、篤、セシリアの3人がにらみ合っていて教室にいる生徒大半が恐怖を覚えたとか

6話 正体不明のIS（後書き）

ホント短いです。

今回でてきた。もうひとつの正体不明のISこれは結構重要になってきますので。

ホント短くてすみません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3522u/>

IS インフィニット・ストラトス ~黒い千本桜

2011年8月20日19時03分発行